

氏名	五十嵐 紀子	
学位の種類	博士(学術)	
学位記番号	甲 第 230号	
学位授与年月日	2022年3月25日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当	
学位論文題目	介護職のリアルと表象の間 —批判的コミュニケーション研究からの一考察— Reality and Representation of Care “Jobs”: A Critical Communication Study	
論文審査委員	主査 教授	青沼 智
	副査 特任教授	カレン, ベヴァリー F. M.
	副査 上級准教授	有元 健
	副査 福岡女学院大学教授	池田 理知子
	副査 元ICU教授	田仲 康博

論文内容の要旨

日本の高齢者人口は、いわゆる団塊の世代が75歳を迎える2025年にピークを迎える。第7期介護保険事業計画(2018年~2020年)に基づいた推計では、介護職員の数は現状のままの推移では2025年には約55万人不足するという。今後さらに加速する少子高齢社会を前に、介護人材へのニーズは高まる一方で、介護職はその社会的地位や処遇面での課題が山積し、敬遠される職業であるという「3K」のイメージとともに、介護人材不足への不安が社会全体に広がっている。介護人材確保のため、国や自治体、職能団体等は、ネガティブなステレオタイプ化されたイメージを払拭し、イメージ刷新事業を進めているが、功を奏していない。

本研究は、介護職のイメージアップ戦略において、イメージ戦略そのものが、介護職のステレオタイプを再生産する働きを無自覚に担っているのではないかという問いを掲げる。そしてその問いについて、介護の歴史的側面、社会的側面、そして教育的側面から検証することを目的とし、「介護が選ばれる職業にならないのはイメージが悪いからだ」という言説を作ってきたコンテキストについて考察する。

また本研究では、method triangulationを採用し、言説を作ってきたと考えられるコンテキストに対して複数のデータを相互に参照しながら「厚い記述」を試みる。具体的には、介護職

がどのように表象されてきたのか読み解くために、ドラマや映画などの映像作品のメディア分析、インタビューや SNS 投稿などによる人々の語り、フィールドワーク、文献調査などである。

以下、導入章である序章・第1章に続き、論文で具体的に展開された議論を章ごとにまとめる。

介護福祉政策の歴史（第2章）:

古代から現代まで受け継がれてきた家族介護による「自助」を基本とする介護政策の系譜を辿る中で、1970年代後半以降、福祉財政を抑制し経済を活性化させようとする、新自由主義（Neo Liberalism）の影響を強く受けた政策が展開されてきたことが確認された。また一方で「介護の社会化」「福祉の市場化」が不完全な形で進行し、前近代的な家制度が第二次世界大戦後も「戦後家族モデル」で受け継がれ、それにより維持されている旧態依然の性別役割分業に基づいた社会的規範が未だ根強く残っていることが明らかになった。

介護の労働問題（第3章）:

介護は家庭内無償労働から職業として位置づけられ、超高齢社会において介護の社会的ニーズはますます増すばかりだが、他の産業に比べて賃金の水準は低いまま推移している。失業対策として介護の仕事が雇用の受け口と位置付けられたり、経済成長のためには社会保障費を抑制する必要があると介護報酬を引き下げ、家族による自助努力を求めたりするなど、国が介護の職業としての社会的価値を低位に維持しようとする姿勢が明らかになった。加えて、介護が長年女性による家庭内労働であったことや、高齢者介護は「家庭的」であるべきとし、介護に献身的な「母性愛」といった旧来の性別役割分業に基づいた価値観を要請する傾向があるといったジェンダー規範も根強い。国の政策だけでなく社会を構成する人々の価値観が介護の労働へのまなざしを作っていることが確認された。

介護職の表象（第4章）:

介護の表象を利用したイメージ戦略が採用されてきたこととその問題点について、検証を行った結果、ポジティブな介護の表象は必ずしも人材確保に寄与せず、むしろその自己ステレオタイプ化が問題を複雑化しかねない問題が明らかになった。加えて、映画やドラマによる介護職の表象は社会の変化による影響を受けていることがわかった。

介護の仕事に関する語り（第5章）:

介護従事者と介護を学ぶ学生を対象として行ったインタビューにおける語りと、SNSにおける語りを分析した。立場や語りのコンテクスト、聴き手との関係性などが異なるため単純比較はできないが、彼らが語る介護の仕事の魅力は「感謝」という言葉に集約されている。学生は実習で苦労しても利用者の「ありがとう」のこぼれに救われる。介護職に就いてから

も過酷な労働や理不尽な対応を強いられたり、他の職員との人間関係がうまくいかないことがあっても、感謝のことばをかけられたり、自ら感謝の気持ちを感じることで、苦労やネガティブな経験が相殺されるといった、それまでの苦労への対価として支払われる報酬が「感謝」であるかのような語りであった。「感謝」という耳障りのよい言葉によって無自覚に隠蔽してしまう労働の問題について目を向ける必要があることについても指摘した。

感動と労働の搾取の問題（第6章）:

介護の仕事におけるやりがいと感動という感情と結び付けられることで、労働としての問題が隠蔽されてしまうことについて議論した。新自由主義社会において人々の感情が利用され格差社会を維持している問題と重ね合わせたことで、国の介護福祉政策や介護人材確保対策に潜む問題が明らかになった。

ステレオタイプ再生産と発見の場としての教育（第7章）:

教育が介護や介護職に対するステレオタイプを維持したり再生産したりする力として働いているのでは、という視点で介護従事者、学校教育における教育プログラムを考察した。実質的に正当な賃金を保証したり昇給が期待できるようなキャリア形成システムとは言い難く、資格取得というインセンティブによって、やりがいを原動力に労働力を確保しようという考え方が根底に存在し続けていることが背景にあると考えられた。そして、学校教育での職場体験等に高齢者との交流活動が組み込まれる傾向について、家制度が廃止された今日においても、親や高齢者を大切にすることを人としての徳であるといった敬老思想が、道徳教育と結びつきやすいことが要因として挙げられた。このような隠れたカリキュラムによって無自覚にステレオタイプ化された職業観や勤労観を抱きながらも、介護の仕事を進路として選択した学生への教育の機会において、自身の中に潜むステレオタイプを発見し、それとどう向き合うかを他の学生と共に考えるという学習の機会を提供するチャンスであるとも言えるとの帰結を導いた。

おわりに（第8章）:

超高齢社会を支える介護人材の確保を難しくしている一端は、介護職に対するステレオタイプなまなざしであり、それを払拭しなければならないという使命感を出発点として本研究に着手した。しかし、介護や介護職のイメージを作ってきた背景を探るにつれ、問題の所在はイメージの悪さではなく、それを払拭するための表象のあり方が、介護の労働問題を見えづらくしているという点にあることがわかった。介護の仕事の魅力が利用者からの感謝や笑顔によって感じられるやりがいという報酬が得られるということに収斂される傾向にある。それによって隠匿される労働問題が社会で共有されるためには、介護業界の内部から意識改革をしていく方策の必要性が示唆された。

論文審査結果の要旨

五十嵐紀子氏の博士学位請求論文審査は、2022年1月19日(水)、午後1時30分より約1時間40分行われた。新型コロナウイルス感染の再拡大状況を考慮し、審査はZoomを用いたオンライン形式であった。審査委員会は、現ICU専任教員である青沼智教授(コミュニケーションスタディーズ;主査)、カレン・ベヴァリー教授(翻訳研究)、有元健上級准教授(カルチュラルスタディーズ)の3名に(なお2021年12月6日提出の「最終草稿」の審査はこの3名が担当)、池田理知子福岡女学院大学教授(コミュニケーションスタディーズ)、田仲康弘元ICU教授(カルチュラルスタディーズ)の2名(なおICU在職時この2名は主査)を加えた5名編成であった。

審査では、まず五十嵐氏が論文全体の概略を、パワーポイントスライドを用いて説明した。その後、各審査委員による質疑およびコメントのセッションを行った。

まず青沼からは、家庭内・家族間の自助とみなされていた介護の社会化・労働化に関連し、論文の英文題目にあるCare“Job”という概念とより一般的なCare Workとの相違、加えて、介護職の表象の問題に対し、本論文で論述がなされた介護専門職養成期間での教育上の試みに加え、コミュニケーションスタディーズから他に何が可能か、という事柄について質問がなされた。

有元委員からは、まず、昨年12月提出の「最終草稿」に修正が十分に加えられ、今回の学位請求論文が非常に質の高いものに仕上がっていること、特に最終章の「食事介助」エピソードに関する論述には心が動かされたとのコメントがなされた。加えて、介護職を専門知識・技能を持った熟練労働者として捉えるべしとする五十嵐氏の主張には説得力がある一方、ブリコラージュ等若干術語の誤記・誤用があることについて指摘があった。

カレン委員からは、第6章の「感情労働」と「やりがい搾取」に関する分析を特に高く評価した上で、「感情労働」にも対価・報酬があるものとそうではないものがあるのではないかという問いが提示された。加えて、本論文の中心的課題では必ずしもないが、介護職に向けられるジェンダー化されたまなざし(gaze)(cf. Mulvey, 1999[Original published in 1975])、またそのようなまなざしと外国人労働者に向けられるまなざしとの比較の可能性、さらには3Kのうち、特に「Kitanai=汚い」が最も決定的な介護職の表象ではないか、という指摘がなされた。

池田委員からは、論文のクオリティの高さ、加えて、今回の論文提出に至るまでの五十嵐氏の研究活動(努力・労苦)に対するねぎらいの言葉があった。その上で、カレン委員同様、例えば第5章の聞き取り調査協力者の「属性」についてのジェンダー的な視点からの分析の可能性、また、やはり第6章の「感情労働」と「やりがい搾取」に関する、介護利用者の言動の分析対象としての可能性(介護利用者のジェンダーや「可愛いらしいおばあさん」像等の問題)について指摘があった。

田仲委員からは、今回の論文が、学位請求論文にはまれな「読ませる論文」として仕上がっているとコメントがあった。具体的には、フィールドの臨場感を効果的に伝える文章のスタイル

(第5章等)、さらには「たたみかける」ような議論展開に対する高い評価がなされた。一方で、新自由主義をめぐる問題等、ややもするとクリシェを用いたありきたりな分析に陥りがちな分析についても本論文の現場の言葉を用いた論述には力が感じられるが、それらの論述のベースとなる文献の一部が参考文献リストから漏れており、再確認すべしとの指摘もあった。

五十嵐氏退出後、審査委員会5名で協議を行い、全会一致で本論文は学位(博士)授与に十分値する論文であるとの結論に達した(「A」評価)。まず本論文は介護そしてそれに携わる介護職の表象をめぐる問題を扱った高い社会的意義を有する研究である。加えて、3Kといったネガティブなイメージを払拭すべく放たれるポジティブな介護の表象の弊害が、マスメディア言説のみならず介護職に従事する者また介護職を目指す者の言説にもみられることを、複数の方法論を駆使したトライアングレーションという手法で明らかにすることを試みた高い学術的意義も認められる。さらに、本研究には、原稿・文章上また研究の過程においても、介護職養成機関で教鞭をとるコミュニケーション研究者という五十嵐氏のユニークな立ち位置が積極的かつ建設的に反映されており、批判的(コミュニケーション)研究としてもオリジナリティに富んだものとなっている。

なお最終原稿・データ(審査後30日以内に提出)の作成にあたっては、今回、審査委員から指摘された誤記、文献のリスト漏れ、その他原稿の形式・体裁・フォーマットに関する修正を行うこととし、また各委員よりなされたコメントのうち、最終原稿・データに追加すべきもの、あるいは学位取得後、本研究から派生した新たな研究として取り組むべきもの等の判断については、主査に一任された。

引用文献

Mulvey, L. (1999[Original published in 1975]). "Visual pleasure and narrative cinema." In L. Braudy & M. Cohen (eds.), *Film Theory and Criticism: Introductory Readings* (pp.833-44). Oxford University Press.

Name	IGARASHI, Noriko
Degree	Doctor of Philosophy
Diploma Number	甲(<i>Type-Kou</i>) No. 230
Date of Commencement	March 25 th , 2022
Requirement of Degree	ICU University Regulation Article 4-1
Title of Dissertation	Reality and Representation of Care “Jobs”: A Critical Communication Study 介護職のリアルと表象の間 —批判的コミュニケーション研究からの一考察—
Committee Members	Chair Professor AONUMA, Satoru Reader Professor by Special Appointment CURRAN, Beverley F. M. Reader Senior Associate Professor ARIMOTO, Takeshi Reader Professor of Fukuoka Jo Gakuin University IKEDA, Richiko Reader Former Faculty TANAKA, Yasuhiro

Summary of the Dissertation

Background, Purpose and Method of the Study

Japan's elderly population will peak in 2025, when so-called baby boomers turn 75 years of age. According to the 7th Insured Long-term Care Service Plan (2018-2020), there will be a shortage of about 550,000 care workers in 2025 if the number of workers remains at the current level. While the need for care workers is increasing, there are growing concerns throughout the society about the shortage of care workers, along with the negative image of the job due to its low social status and low wages. The national and local government, and professional organizations have been working to dispel negative stereotypical images of the care jobs. They promote image renewal projects in order to secure adequate human resources, however, such recruiting strategies have never been successful.

This study poses a research question: Is the image enhancement strategy itself responsible for reproducing stereotyped images of the job? The purpose of this study is to examine this question from the historical, social, and educational aspects of carework, and to attempt to understand the context that has created the discourse that "care job would not be chosen because of its poor image."

This study employs method triangulation and attempts a "thick description" of the contexts that are thought to have created the discourse by cross-referencing multiple data. In order to interpret

how care workers and care jobs have been represented, media analysis of films and dramas, care workers' and students' narratives through interviews, SNS postings, participant observation in fieldwork, and literature review will be used.

What follows will offer the outline of each chapter contained in the study (except the first two introductory chapters):

History of care work policies (Chapter 2):

The genealogy of welfare and long-term care policies based on "self-help" through informal care by family members shows that they have been strongly influenced by Neo-Liberalism since the late 1970s, which seeks to suppress welfare finances and stimulate the economy. Progress of "socialization of care" and "marketization of welfare" in an incomplete manner has been enhancing the pre-modern family system inherited as the "postwar family model" even after World War II.

Labor issues of care work (Chapter 3):

Care work has been positioned as an occupation instead of unpaid domestic labor since the care insurance system was launched in 2000. While the social needs for long-term care are increasing in the super-aging society, the wage standard remains low compared to other industries. The government is trying to maintain the prestige of care work at a low level, for example, by regarding their work as a source of employment for the unemployed, and by requiring families to help themselves in order to curb social security expenses for the sake of economic growth. In addition, there are persistent gender norms, based on the fact that care work has long been unpaid domestic labor for women, and people assume that caring should be "home-like," demanding old values, such as devoted "maternal love" for care workers. The policies of the government are not the only factors that reproduce old gender role consciousness, but the values of the people living in the society also create the gaze toward the caring labor.

Representation of care work (Chapter 4):

As a result of examining the occupational branding strategies of care work, it was found that positive representations of care workers do not necessarily contribute to securing human resources, but rather that their self-stereotyping could complicate the problem. In addition, the representations of care workers in films and TV dramas were affected by social changes.

Narratives on care work (Chapter 5):

Narratives given by care workers and students studying care work during the interview, as well as those found in the posts on social networking sites, were critically analyzed. While it is not possible to make a simple comparison because the contexts of the narratives and the relationships with the interviewer were not the same, the attractiveness or appeal of care work described by the interviewees is summed up in the word “gratitude.” Even if students might have a hard time in practical training, they will be rewarded by the words of “thank you.” Care workers are forced to work hard, have to deal with unreasonable situations, or have difficulties working with other staff members, they receive words of gratitude or feel gratitude themselves, which offsets their hardships and negative experiences. It is necessary to look at the labor issues that are unconsciously covered up by the pleasant word.

Emotion and labor (Chapter 6):

This chapter examined how specifically the “rewarding” nature of care work is associated with the emotional inspiration, which could hide its labor issues such as “reward exploitation (yarigai sakushu).” By discussing the problem that people's emotions are used in neoliberal society to maintain a society of inequality, it became clear that there are hidden problems in the government's care and welfare policies and measures to secure care workers.

Two sides of education: reproducing and discovering stereotypes (Chapter 7):

This chapter assessed educational programs for care workers and also in school education from the perspective that education may act as a force to maintain or reproduce stereotypes about care jobs and care workers. The career development system will not practically guarantee adequate wages or raise salaries, and securing a workforce driven by motivation through the incentive of acquiring qualifications will leave the root problem behind. Although the activities to interact with the elderly are a part of career education for children, respect for the elderly, or a virtue to cherish their parents and the elderly, will be easily linked to moral education and be more emphasized than career education. Even though students may have unconscious stereotyped views of work and occupation due to the hidden curriculum, this is also a chance to offer them opportunities to discover their own hidden stereotypes and think about how to deal with them together with other students.

Conclusions (Chapter 8):

This study began with a sense of mission to dispel the stereotypical images toward care workers that make it difficult to secure workers to support our super-aging society. However, as we explored the background that has created those images of care work and care workers, we found that the problem lies not in the negative images themselves, but in the way that representations have been used to change or eradicate those negative images, leaving the critical labor issues behind. Branding strategies of care work tend to converge on the reward of satisfaction felt through the appreciation and smiles of the clients. This study suggested the significance of countermeasures to evoke awareness change within the care industry in order that the labor issues hidden by such emotional rewards are socially shared.

Summary of the Dissertation Evaluation

Oral defense of Ms. Noriko Igarashi's dissertation took place on Wednesday, January 19, 2022, from 1:30 p.m. Due to the resurgence of COVID-19 infection, the oral defense was conducted online using Zoom. The dissertation committee consisted of Professor Satoru Aonuma (Communication Studies; Main Advisor), Professor Beverley Curran (Translation Studies), Senior Associate Professor Takeshi Arimoto (Cultural Studies) (these three are the current ICU full-time faculty members; they also reviewed Ms. Igarashi's "final draft" submitted on December 6, 2021), Professor Richiko Ikeda (Communication Studies; presently at Fukuoka Jogakuin University), and Professor Yasuhiro Tanaka (Cultural Studies) (Both Professors Ikeda and Tanaka were Ms. Igarashi's Main Advisors during their tenure at ICU).

In the oral defense, Dr. Igarashi first gave an overview of her dissertation using PowerPoint slides. This was followed by the question/answer/comment session.

First, Aonuma asked Ms. Igarashi to clarify the difference between the concept of care "job," the term used in the English title of the dissertation to denote the professional nature of contemporary nursing care, and the more general idea of care "work," the term that has the connotation of traditional self-help between family members. He also asked her, besides the classroom teaching of critical-analytical communication skills to prospective nursing care professionals, what else the discipline of communication studies can do to address the problem of the representation of care workers.

Dr. Arimoto commented that enough and thorough revisions and improvements have been made to the "final draft" submitted in December of last year and that he found the dissertation very high quality. He added that he was particularly moved by the discussion of the "meal care" episode in the last chapter and that Ms. Igarashi's argument that nursing care workers should be regarded as skilled workers with specialized knowledge and skills was persuasive. Finally, Dr. Arimoto pointed out that there were some typographical errors and/or misuse of technical terms that need to be corrected (such as bricolage).

Dr. Curran commented that she found the analysis of "emotional labor" and "reward exploitation" in Chapter 6 particularly insightful. She then asked Ms. Igarashi whether there are some types of "emotional labor" that are to be compensated and some others that are not. In addition, she suggested that, while not necessarily the central issue of this study, the gendered "gaze" (cf. Mulvey, 1999[Original published in 1975]) directed at care workers and the possibility of comparing such a gaze with that of foreign workers could have been addressed and that "Kitanai (dirty)" may be the over-determining element of care professional's 3Ks.

Dr. Ikeda praised the high quality of the dissertation and also several years of Ms. Igarashi's research effort leading up to the submission of this finished product. She then suggested an analysis of the gender and other demographic attributes of the interviewees/collaborators in Chapter 5 and that of the discourses of care service "users" given in Chapter 6. Referring to her own experiences of observing interactions between care work professionals and some service users acting as "cute old ladies," she pointed to the possibility that some discourses of service users may contribute to and perpetuate the problem of "reward exploitation."

Dr. Tanaka commented that, unlike most of the doctoral dissertations he had worked on (including his own), Ms. Igarashi's was "readable" and "fun to read." Referring to her writing style, he found that the discourse in this dissertation effectively conveys a sense of the real in the field. In addition, describing it as "hard-pressing," he highly evaluated the way she developed arguments throughout. He also pointed out that some of the basic references for these arguments were omitted from the reference list and should be doublechecked.

After the question/answer/comment session, Ms. Igarashi left Zoom, and the members of the committee deliberated on the merit of the dissertation. They eventually and unanimously reached the conclusion that the dissertation was of exceptionally high quality hence should warrant the awarding of the doctoral degree (letter grade "A"). First, this dissertation deals with problem of

representation of nursing care and nursing care professionals, a topic that has high social significance. Second, the dissertation has high academic significance: Using the triangulation method, it succeeded in exposing and critically exploring the adverse effects of “positive” representations of nursing care (purpose of which, ironically, is to dispel negative images of the profession such as “3K”) seen not only in mass media but also in care professionals’ own discourses. Finally, this dissertation has original contribution to critical communication scholarship, as Ms. Igarashi effectively, constructively, and persuasively utilized her own unique positionality (an expert scholar teaching communication to would-be nursing care professionals at the higher education level) in researching and preparing the manuscript.

In preparing the final revision of the manuscript data (to be submitted within 30 days of the oral defense), the dissertation committee agreed that Aonuma (Main Advisor) would (re)work with Ms. Igarashi regarding the necessary editorial work. The committee also left to Aonuma the decision as to which of the comments raised during the oral defense should be incorporated to the final version, which should be a new “post-doc” research project derived from this study, etc.

Reference

Mulvey, L. (1999[Original published in 1975]). “Visual pleasure and narrative cinema.” In L. Braudy & M. Cohen (eds.), *Film Theory and Criticism: Introductory Readings* (pp.833-44). Oxford University Press.